

国立民族学博物館の収蔵品 ②5

# 染織技術解説パネル

## 技術から知る南アジア



南アジア展示場の「染織技術解説パネル」

わたしたちの身の身の回りには、衣服や調度品など数多くの染織品がある。手仕事やものづくりは、その地域の文化や社会のエッセンスが凝縮されているため、世界各地に多様な染織品が存在している。筆者は、二〇〇八年より国立民族学博物館（以下、民博）にて文化資源である現地の人びとのものづくりに関する技術や知識をどのように伝えることができるか、展示やワークショップを通じて研究を進めてきた。

民博は、二〇〇九年より本館展示場の改修を開始し、二〇一五年三月十九日には、南アジア展示場も約二〇年ぶりに全面リニューアルをした。南アジア展示場に並ぶ数多くの染織品。それらのキャプションには緋織、紋織、捺染、媒染剤など、専門用語がたびたび登場する。興味はあるが染織品のどこに注目してよいかわからない、専門用語が難しい……。そのような人びとに向けて、南アジアの特徴的な染織技術を紹介する「染織技術解説パネル」をあらたに設置した。

技術を展示するとき、映像や写真といったメディアに頼りがちだが、わたし自身それが最良の方法とは考えていない。思案した結果、南アジア展示場では、技術模型と南アジア各地で収集した実物を多用する方法をもちい、一六枚の両面パネルによる「染織技術解説パネル」を考案した。パネルには刺繍やアップリケの縫い行程、平織・綾織・縺子織の組織の違い、紋織や縫取織、綴織、緋織などの織技術、複雑な多



刺繍や染め、織りなどによる標本資料（南アジア展示場）

色染めの行程などをとりあげた。それぞれの技術の特徴を南アジアの実物の布をもちいて説明することで、来館者の興味を増幅させるデザイン構成とした。

また、染織品は表面と裏面をみることで理解をより深めることができるため、技術パネルも回転式にし、両面からみることで縫い目や織り目などをじっくり観察できるようにした。さらに、南アジアの染織技術を支えてきた木綿や羊毛、野蚕など多様な天然繊維素材や、ビーズやタカラガイ、ガラスミラーなど多種類の刺繍素材の実物も回転式アクリルケースに入れて詳細に比較できるようにした。

南アジア展示場の染織品と技術パネルとを見比べることで、村落の女性による刺繍技術は、限られた布や糸を最大限に工夫していること、職人による染織技術はいくつもの道具や分業によって支えられてきたことがわかるようになっていく。技術を知ることはいくらも手には思いをめぐらすことでもあるのだ。

南アジアは染織のメッカともいえ、地理的環境、社会的背景からも多くの天然素材や多様な染織技術が存在している。そのため「染織技術解説パネル」は、世界の染織文化においても有用な汎用性のある内容となっている。一般来館者や染織愛好家、芸術系の学生や作家、研究者などが、民博の他地域展示場の染織資料においても、通文化として染織文化を比較するうえで意義のあるツールであるといえる。

（上羽 陽子）